

入れ歯は石で叩いて外し取ったとみられる跡があったという。ソ連の物資不足の深刻さと、彼等の国民性を垣間見た思いで、大きい衝撃を受ける。

戦後、チタ地区独立墓地と呼ばれたここカダラ墓地は、昭和三十六年八月、厚生省が主催する日本人墓参団が派遣され、初めて遺族代表の手によって香花が供えられ、懐かしい酒やタバコを味わえたこと、せめての慰霊となった。

当時の新聞の見出しには「果てしなき荒野にただ涙」と書かれ、改めてこの地に果てた同胞の悲惨さがしのばれた。この墓に眠る我らの戦友の一人一人を思い起こすと、まだ少年のあどけなさの残っていた顔が浮かんでくる。報道では墓地は整然と並び、管理が行き届いていたとあって、救われる思いであった。

それでも可搬式ボーリングマシンを原隊から持ち運んでおり、磨耗甚大なるエンジンはその場で研磨し、新しいピストンと取り替え新車同様とするのも私の専門だった。

シリンダ研磨した車の試運転で僕が助手席、部隊の兵が運転して錦州灣を望む丘陵から、三原色鮮やかな中国独特の寺院を経て無事試運転終了。降車の際、定期的潤滑油の交換を指示した記憶がある。

そんな折だった、北支から本土防衛に向かうんだと称する四枚プロペラの新鋭戦闘機が燃料補給に立ち寄った時、その新鋭機に祈りを感じたのも自分一人ではなかったらう。

移動修理班最後の任地となったのが、熱河省の熱河独立守備隊である。

八月初めであった。移動は列車であったが、この辺は時々匪賊が出ると言う。

列車は登り勾配を喘ぎながらノロノロ登るのであるが、線路の両側至る所に大きな岩石があり、

火炎夜空に凍土掘る

岩手県 吉田 欽三郎

一、終戦

敗戦と混乱

昭和二十(一九四五)年三月、北滿榆樹屯(現中国東北部)の航空部隊におった私は、作戦命令により移動修理班の一員として南滿に転出した。

本土決戦に備え、南滿航空隊にある老朽した自動車動く車とすることだった。

最初の任地、錦州飛行場部隊には二カ月ぐらいいもおったろうか、一般用トラックはもちろん、ガソリン補給車・プロペラ始動車等、軍務のことなれば一生懸命やった。

修理班は少尉を隊長とし、自分以上の上級者は隊長と古参兵長の二人だけで、新米兵長の自分を挟んで一等兵二人、二等兵四人と軍属二人の計十一人ぐらいいだったらう。

これに隠れて列車を狙撃するには西部劇ならずとも全く都合よい場所があったりして緊張した時もあった。

到着した部隊では、あの山の稜線には八路军が出ると言う。

且つそれをその夜、実際に見たのである。いつ襲われるかも知れないと言うのである。工具はあれど兵器は帯剣一つだけの移動修理班である。

翌朝、隊長は何の命令をどう受けたのか、修理もせずに奉天の航空廠に逆移動し帰隊したのである。

八月十五日！あの日私は命令により自動車部品受領のため補給廠に赴いておったが、その部隊の兵に「日本は降伏したらしいですよ…」と聞かされた。

一瞬血が引き、身の引き締まりを感じたが、それは正しく自分にとっては晴天の霹靂であった。

隊の中には新聞もラジオも無く、ことに母国日本の趨勢・ニュース等全く知る由もない軍隊生活

であり、且つそれが日本軍の教育だったのである。

半信半疑？大事件にあった子供が親にも継る思いで急遽帰隊したが、部隊工場の床は部品が散乱し、内務班は正に騒然たる状態であった。

「オーイ吉田、聞いたか、日本は降伏したそうぞぞ… どうする…」

ある者はうつ伏せ、ある者は卓を叩き、ある者は天井を睨む、ある者は兵同士何かを話す…

…だがほとんどの腕を組み無言のまま何かを睨んでいる状態だった。一体我々はどうなるだろう、どうすればよいのだ。

力が抜けた腑抜けとはこのことなのか。これが本当に日本の皇軍と言われたあの姿なのか、「いかにして死ぬか…」。歓呼の声で送られ、死んで還れと励まされた駅ホームでの万歳がチラリと浮かぶ。死への直面は初めてだ。一瞬、血だらけになって横たわる自分の姿も脳裏に浮かんだのである。

こんな時、中隊付きの若い将校がこの日の夜、中隊の廊下の真ん中で怒鳴った。

を今でもハッキリ記憶している。

隣の班の者からは「良い自動車があるか」と言う。隣の班の者に車をやらずとも、我々は故障の際の部品も持ってるし、修理の技術も知っている。

「皆で逃げよう」と言ったが、「逃げても駄目だ、南満の道は既にロシア軍が抑えているだろう…」

「ではホトボリの覚めるまで山の中で暮らすか」

「だが日本人は米と味噌がなければ駄目なんだ

…」

「では炊事から…」

「…でも満語はどうなんだ

…」

「片言なんかでは却って怪しまれるぞ…」

次の日、中隊の連絡兵が奉天駅で見てきたと言う。駅は日本へ帰る人達でゴツタ返しで大変だったと言う。どここの部隊の者か分からないが一人で逃げた者が殺され、裸になって転がっていた。

今までは女性が一人で歩いても安心できる王道楽土と言われた満州国だったのになア…と、逃げることに大きな不安がまつわってきたのである。

そしてソ連が国境を越え楡樹屯の原隊、第九野戦航空修理廠の近くにあった補給廠は自らの手で

「お前達よく聞け…いいか、今から俺の言うことにソツがあつたらこの場で殺せ。いいか、日本はソ連ではない、アメリカに負けたんだぞ。いいかお前達、死んではならないぞ。必ず生きて還れよ、死んではならないぞ、生きて還って必ず日本を再建するんだぞ…」。それがためには蒙古へ逃げろ。蒙古にはジンギスカン以来日本を知る、日本人をよく知る同志の仲間達がいるんだ。いいか、生きて必ず日本を再建するんだぞ…」と。

我々も逃げようかと話した。逃げなければロシアの捕虜となるのだ。然し、死して虜囚の辱めを受けず、とも習った。

「だが、生きて日本に還らなければ誰が日本を復興するのだ」との思いもある。

「生か…」

「死か…」

否、捕虜になるのか。初年兵も「兵長殿、我々はどうなるんですか？」と言う。「分からん…残りの飯で握り飯でも握っておけ…」と。逃げるか、捕虜とならねばならぬか、正に両面の考えがその時の答えであつたこと

火を放ち、その炎は天まで上がり、その轟音は凄まじいものがあつたと伝わってきた。部隊の中にはもう衛兵勤務以外の軍務は全くなかつた。

こんな時である、九州の山口古参兵が我々に言ってくれたのである。

「捕虜になつても仕方がないじゃないか、ロスケと我々対一人とでは…何をやられても、何がどのようににされても仕方がないじゃないか。中隊全部…いや部隊全部が一緒だったら、皆と一緒だったら彼等だつて無茶なことも言わないし、できないと思うんだよなア」と言つたのであつた。

この数日中、この混乱の最中、隣の班の者数人中、首謀の者が将校室から将校服を盗んでこれを着、演習と称し衛兵所を通つて自動車もろとも堂々と逃亡した者があつたと聞いたが、四年経ちダモイした舞鶴の帰還者名簿には未だ掲載されていなかったと言う。

思えばあの時、あの将校が話したことが現実となつて現れたのである。

しかし彼等は今どうなっているであろう。武装解除された我が部隊は近くの戦車隊と統合され、その兵舎に移った。そして武装解除のあの日の光景も到底忘れることはできないのである。部隊全員が営庭に集合させられ、兵隊から一列となつて次から次へと銃と帯剣を捨てて銃の山積みを作った。それは菊のご紋賞の付いた三八式歩兵銃である。

ソ連軍将校はこれを確認し、ソ連兵は遠巻きとなつて自動小銃を構えている。

やがて日本軍将校も一人ずつ軍刀と拳銃を捨てるがごとく丁寧に置いていくのであつた。

あの軍刀の山の中にはさぞかし先祖伝来、蔵の中から出して与えられたであろう名のある銘刀もあつたであろうと思えば他人事ならず、敗戦という未曾有の憂き目には、皆同じ思いであつたろうと思うのである。

第二回目の移動があり、ある駅に着いた。隣の線は南下する貨車であつて、図らずも日本に向か

からだ。

後ろからはソ連兵がダワイ、ダワイと急き立てる。

金棒に米袋を吊し二人一組となつて堤防から運んでいる時だつた。

東満から来たという別の部隊の兵が急に横から飛び出し、この米袋を抱いたまま、転がり落ちながら盗んでいったのである。

堤防の下ではその部隊の兵が群がり寄つて米を奪い合っている。突然のことだつた。だが何たることだ。これに向かつてソ連兵が機関銃を撃つたのである。

東満の兵は一斉にクモの子のごとく四方へ逃げた。活劇でも見るごとく、一瞬呆然となつておつたがハツと我に返る。同じ日本人だ。米くらいと思つても相手はソ連軍であり、我々は既に二十日以上も捕虜となつて彼等の管理下なのだ。聞けば久しく米の飯を食べなかつたと言う。

戦勝国と敗戦国、ソ満国境前線で終戦となり、

う開拓団の人達であつた。男装の女性もおり、青々とした坊主刈りの頭もあつていかにも可哀想だつた。

「兵隊さん、どうして日本は負けたの……」

「……もう負けたんだよ……俺達だつてこれからどうなるか分からんだぞ……」

我々は貨車にスシ詰めとなつて列車はそのまま北進した。

駅に停車する度ごとに貨車の屋根の上にはソ連兵が機関銃を構えて立ち、ソ連将校は何をわめくのか、分からぬことを叫びながら列車の前後を只々走り何かを監視するのである。

ソ満国境

黒河に着いた、ソ満国境である。

列車から降ろされた我々は糧秣の入つた袋を移す作業に入った。ここは引き込み線と堤防、堤防の下は黒龍江であり、広い河の霞む対岸はソ連領である。誰もが黙々と動いている。誰もが働いているのではない、動いているだけなのだ。捕虜だ

そのまま抑留されて移動となつたらしく、持たざる彼等と、後方の航空部隊にあつて食料持参の我々と、そして生死一瞬の違いを捕虜という非人間的差別なるが故の惨めな、そして哀れさを強く感じさせられた一コマであつた。

いよいよ満州国とも別れ国境渡河となる。水面に指の届く発動機船であつた。黒龍江の水は素知らぬよう、何事も無かつたように次から次へと満々として流れている。

水面に写る自分達の姿は黒い頭だけであつたが、水面のキラキラ光る反射と交々となり、写つては消え、また写つては波に遮られて消えるのであつた。

波任せなのか……誰任せの捕虜であろう……一難あつて二難あり、我々の前途には何か知らねども不安が過るのであつた。

第四小隊 第四分隊長

船から上がった我々は部隊長の訓示があり、一同が整列する。

少し大きな荷物を台として、それに上がった部隊長は

「ここはソ連の国である。これからは日本人として、諸氏は日本人としての自覚と心構えを！」の内容だったと思う。

ただ…、いつの時も腰から軍刀を外して左手に添え、斜めに置いて訓示する構えは無く、無腰の姿が忘れられない印象だった。

この船着場より隊列を整え、第一中隊より街の中を通過して駅に向かったのである。だがいつ…、どこからどう集まったのか、我々の回りにはソ連の男女が物珍しそうに立っているのではないか。一体やつらは我々をどのように見ているのであろう。

軍服は着ておれど飯盒に雑のう、防寒衣と私物袋を背負った姿の我々なのだ。銃もなければ帯剣もない。将校とて全くの丸腰であり私物を背負っており、敗残兵？ならずとも、決して褒めた恰好よい姿ではないはずだ。皆敗戦国の捕虜なのだ。

ここはソ連領内、建物も違う。居並ぶ一般人の

た。

盗まれた時計は盛岡出征前、市内の時計店より購入したもので、当時は兵隊用として防塵カバーとバンドには磁石の付いたいわゆる入営のための餞別の記念品であった。

小隊長も四囲の空気を察したのであろう。

「大丈夫です」と強がったものの、何となく身の縮む思いだった。

分隊が持つておった飯盒炊事用の鉄パイプを鬼の金棒代わりに地面に突き立てて、わざと音をたてながら後に付いて行進したのである。

西か？ 東か？

この地、黒河の対岸ブラゴエシチェンスクからまた列車に乗せられシベリア鉄道に向かう。地図の上ではこの線路はT字状であって、頂点の分岐点で右と左に別れ、右の方に行けばナホトカであって日本に近くなるが、左の方向に走ればモスクワとなって捕虜となるのは間違いないと言おう。(当時、兵隊仲間には大学生もおり地理上も詳し

目の玉も青白く光ったロシア人ばかりであり、昨日までの敵国人であり、戦争に勝った国の人達なのだ。

しかし、捕虜とはいえど自分は第四小隊第四分隊長である。(移動中、正式に伍長となる)であるから、どうしても部隊の最後部に位置し、後方にあつて部隊の隊列を監視しつつ、しんがりとしての責任を持ちながら行進しなければならぬのだ。いつの間にか、すぐ後ろから一般のソ連人が付いて来る。子供までもが動き回る。この地に来るまでの間、捕虜になつてからの移送中、夜、用便に貨車から降りた時、三人のソ連兵に囲まれ一人は将校で拳銃、二人の兵隊は自動小銃で僕の胸元に銃を突きつけ脅かされ探られて、時計と万年筆を盗られた：ことがあつただけに、今度は背中の袋か？それとも分隊の誰かの袋であらう、スキあらばとの感があり、隊列を乱さぬよう最後部列外の一人は緊張の連続だった。

「吉田、大丈夫か：」と言つて小隊長が回つて来

かつた)

貨車の中ではこの話ばかりであり、運命の分かれ道となるのであろう。

「シベリアに連れて行かれる」と言う。「どんな寒さの所なんだろう」

「本当にツンドラ地帯なんてあるだろうか？」
「なにを：どんな仕事をさせられるのだろうか：」

「ヤポンスキーソルダート(兵隊)、トウキョーダモイ(日本へ帰る)」とソ連兵から直接聞いた者がいると言う。

「戦争の責任は将校以上であつて、我々兵隊はこのまま日本へ帰れる」と言う者もいる。
狭い貨車の中では憶測と流言、そして前途への不安そのものの話ばかりである。

夜になり、外は暗くなった。

ただ…、ゴトンゴトンと鳴る車輪の音ばかりだ。故郷のこと、親のこと、兄弟・友達、日本でのすべてのことがしきりに思い出される。果たして明日の我々の運命はどうなるのであろう。

やがて列車の夜も明けた。

誰が言ったのか「オカシイぞ： 西に走っているぞ：」皆飛び起きた。

「西だ：」「西の方だ：」と騒がれて、小窓に飛びつく者、大戸からのぞく者。

大騒ぎとなったが万事休す、終わりだったのである。

またしても大戸から外をのぞいたが木の影、陽の射した建物の影、いずれを見ても正しく西の方向に走っており、見も知らぬソ連である。外国の景色が流れるだけだったのである。列車は速度を速め汽笛の音も憎らしく、皆力が抜け呆然たる思いだった。

かくしてシベリアの抑留捕虜生活が始まらんとするのであるが、それは奉天出發以来約三十日を貨車生活で費やした日の出来事であった。そして走行中はほとんど黒パンの食事支給であった。

黒パンは一個で十人分もあつたらうか、分配の時は明かりもない貨車の中、松明の光の元、何十

人もの強い視線を浴びながらの分配であつて、それをやり、やらされたのがいわゆる初年兵であつた。

貨車の二段ベッドの上からは古参兵達の「平等だ：」「平均だぞ：」の声は未だしも、そっちのパンが大きい、こっちのパンが少ないとの声を受け、騒がれながら食事分配の嫌らしさを覚えたのもシベリア鉄道捕虜のなす業であり、生きんがための食欲の兆しとなりつつあつたのである。

貨車の中ではこんな生活を続けながらバイカル湖とやらを越えて、十月の初め、この地タイシエツト四十一キロの収容所に着いたのである。

二、抑留初の伐採作業

収容所営庭に並べさせられた捕虜一同は千人ぐらゐも居つたらうか。正面に部隊長、横に副官、前に各中隊長、我々兵隊の後方は傾斜地であり、収容所があつた。

前方衛兵所を介して道路と鉄道路線があり、あの線路で我々が輸送されて来たのである。ここが

我々の住居であるらしいが、四囲には櫓が立ち、外柵と鉄条網、その間には入らぬよう、入れば脱走と見なされ撃たれるという注意があつた。

訓示にはタイシエツト四十一キロメートルの収容所であると言う。

そして我が小隊は他の者達と共に百二十人ぐらゐも入つたらう。ここも二段ベッドの大きな布張りの天幕が住居となつたが、右も左も分ならず、薪ストーブ一個の寒さと薄暗い裸電球の下、防寒外套の着の身着のまま、シベリア第一夜は天幕生活の侘しさに、靴も脱がずに眠つた。

伐採作業の思い出

翌日、中隊として小隊ごとに何やら仕事らしき割り当てがあり、数十人と連れて行かれ、持たされたものが二人引き鋸と斧であつた。

案内するのは囚人上がりの一般人で、作業班の前後には機関銃を持ったソ連兵が付く。

沢を越え谷に入りさらに山地に入った所で、これから伐採すると言う。

見渡す限り松の大木ばかりであり、好むと好まざるに関わらず、自らをして仕事の選択のできないのが捕虜である。

内地での伐採の経験等全く無い自分である。二人引き鋸相手の戦友もそうであつた。ロシア語で何か言っているのであるが、伐採の班全体を集めてのしつかりした説明もなく、ただダワイダワイと急かせるのである。

とにかく二人でこの大木を伐つて倒し、ノルマとしなければならぬ。高さで三十数メートルはあろう、根元の直径でも一メートル以上はあるのである。一つ間違えば幹の下敷きにならずとも、倒れた時、折れて飛んだ枝に当たつても死になると言う。

さてこの松の大木、どこから伐つてどの方向に倒すかが伐採の難しいところらしい。幹の高さを半径とする円の中に、同じ戦友が伐採をしていないかどうか、怪我をさせないと同時に、隣の大木がこちら側に倒れてこないかどうか、しかも枝の

張り具合と風の方向にも関係があつて、倒れる瞬間、幹が回転して思わぬ方向になる危険性もあるらしい。

初めての作業に教えることも、正しい伐り方の見本も何もないのだ。分からぬこととは言えど、捕虜は先ず伐ることであり働くことである。

根元に深く斧で刻みを入れ、手前より相手と共に鋸で伐り始めたのである。屈みながらの鋸作業であり、根元も太く、初めての相手とも呼吸が合わず休みながら伐った。

やがて伐り終わりも近づき「倒れるぞ」と四方に叫びながら根元から離れるのであつたが、冬作業のこととて雪の中を急いで逃げなければならなかつた。

しかし、粉雪を飛ばし地響きを立ててあの大木が倒れる瞬間の伐採は正に痛快なる気分である。瞬時の喜びもつかの間、この幹を所定の長さに切った後、さらに枝を鋸で切断、焼いて処理しなければノルマは終わらないと言うのである。

た捕虜生活である。

年齢正に二十四・五歳、男子兵隊成れの果てである。飯盒一杯ぐらいの量はいとも簡単である。私も二食分一度に食べて満腹の気分を味わつてみたかつた。…だが昼食後の作業はどうなるだろう。果たして夕食にありつける寮までの道程等、それまで身体が保つだろうか。

「班長殿、大丈夫ですよ」と、九野航原隊以来の初年兵が笑いながら言う。

元気者だ、ままよ食っちゃおう。

空腹で夜中目を覚まし、水筒の水で我慢したこともあつた環境なればこそ、嬉しい満腹感であつた。

昼食の時はもちろん、見掛け携行の空飯盒で雪を溶かし、白湯を飲み腹に入れた。

仕事も今まで通りできたし、夕食にありつける収容所までも帰れたのである。

これは侘しく恥ずかしいことながらも、事実のことなれば敢えて暴露し、忘れられないシベリア

生の枝であり、しかも単に枝とは言えど直径が十センチ以上もある太い枝ばかりである。内地であれば残し置いて薪とするものなれど、ノルマには関係ないことである。

だが：この後片付けの仕事こそ難中の難事であり、細かい枝しか焼くことができなかった。冬の落日は早く、やむなく未処理のまま帰ることが多かつたが、日曜日の休みに残物の枝処理として作業に狩り出されることもあつたのである。

憩いの昼食

楽しみはもちろん昼食である。

水筒を温め少しばかりの食事であつたが、ゆつくり食べることであつた。

毎日の食事だつて本当に少なかつた。朝、炊事からもらう朝・昼の二食分合わせても飯盒を満たすほどの量もなく、朝の出勤前、昼の分も一度に食べてから仕事に出る者が多かつた。

毎日毎日がきつい仕事であり、収容所に帰つたからとて夕食外の間食があるでなし、できなかつた

の記録とする物語である。

三、入ソ二年

積載班の作業

ヨイト巻く 大木めぐりて 秋の蝶

作者名は不明であるが、当時の積載班は戦車隊の頑強な他中隊の人達が多かつたという。その積載の人達が貨車の車上にあつて、重い大木を巻き上げるそのロープの回りを白い蝶々が飛んだと言ふ、ただそれだけのスケッチである。

しかし蝶とは本来「春」の季語であるが、秋の蝶と詠んだ作者は虜囚の故だろうか？ 否、本当に秋であり、小春日和の暖かさに誘われた蝶々が、巻き上げられる大木の回りを飛んだかも知れないのである。

ただ分かることは純粹無欲であり、全く綺麗であり素直な俳句であることだけだ。

前項の伐採された原木は、山より馬と櫓によつて麓の集積場まで運ばれ、貨車積みとなるのであるが、この積載の人達こそ大変な苦勞をされたの

である。

作業は、集積場から原木を貨車の上に渡した長木の上を六人協力の力とロープで巻き上げるのであるが、六人の呼吸が合わなければ逆に滑り落ちて、下の者が事故となる危険性が大きいのである。

左右均等、同じ力で巻くにしても根元は重く、原木の円周・長木の円周、線と点の接触なれば、厳寒期では雪も氷であるから「ヨイト巻く」の言葉以上の細かい作業の呼吸が大切らしい。

それにも増してこの積載は、休日に拘わらず日勤者が帰る時間帯であっても、貨車が入線した通知によって「積載班集合」の命令が四六時中あったのである。それはノルマの国であり、捕虜だからだ。

これが労働の源泉であるべき米の飯の環境ではない、黒パンと燕麦のスープでの食事なのだ。

「積載は重労働だからもつと飯を食わせる…腹が減って原木も上がらないじゃないか…」一五〇

このような捕虜の生活の中にも俳句があり、生まれて、そして好きな者同士が集まったのである。自分も同じ寮の先輩福島曹長に誘われ、学んでみることにした。

これまでの俳句は、小学校の（朝顔に釣瓶とられて）（古池に蛙飛び込む）と、兄の本棚より（蒙古路に立ちほだかりし雲の峰）の句集を読み少しく興味を増したが、さらに、俳句の季語を連ねた『歳時記』内の森羅万象奥深さを知った思い出があった。

今回、同好の者達が集まったが「ヨイト巻く太木めぐりて…」には全く心から魅せられたのであった。

そして二回目の句会には僕の投句した「うらゝかに 異国の空は 晴れてあり」が思わずも天地人の三席に入り気を良くしたのである。

福島さんも当時、井戸掘りの班長をしており「今日（ナリ）井戸より出て 若葉風」等、互いに心の疎通が増し、心に残る句もあつたりして、

グラムのパンとスープであり、昼食は高粱か燕麦の柔らかい飯の給与である。

「俺達日本人は朝・昼・晩、固い白飯ばかり食ってきたんだ、こんな軟らかい食い物なんかで仕事ができるもんか」と言ったところで、それも空しい捕虜の身の上である。

高くて頑丈な衛門、回りには細長く尖った丸太を立て並べた高い塀、その上をさらに鉄条網、四圍の櫓の上には終夜ソ連兵が立ち、機関銃と共に監視の目を光らせていて逃げることはもちろん、生きることに苦しい異郷の涯の捕虜強制収容所だったのである。

前文 ヨイト巻くの俳句は、わずか十七文字の字句であるが、優雅にかつ尊い労働の姿を浮かび出し得、終生忘れることの出来ない事象であり、これを基（モトイ）とした発句とそれを成し得た作者こそ偉大であり、私自身にも替え難い心の大きな糧となつたのである。

俳句入門 一年生

逆境のシベリアにあつては良き精神的安らぎを得たものと喜んでおつた。

句帳の紙も鉛筆も買えない貰えない捕虜生活である。民主新聞の白い端の部分の部分を切つて投句用に使いたかつたが、新聞は戦友達の煙草用巻紙であり、もう事はできなかつた。貨物工場窓材の板切れ（ $3 \times 50 \times 80$ ）を鉋で削り、胸ポケットに入る大きさの薄板にして、持ち歩き句帳代りのメモとした。

鉛筆も大工さんが捨てるものを箸状軸に、膠にかわ付けたものを大事に使つた。

選句用の紙も無かつたから、俎状板 数枚に鉋掛けし、消し炭で書いた。

しかしこうした苦勞の集まりも四〜五カ月で終つたのである。それはせつかく知り得た俳句の仲間が欠けて居なくなつたからである。

皆混沌みなこんとんとして、シベリアのソ連軍当局管理者には勝てなかつた。

当時、三交替勤務は日勤・夕勤・夜勤で、勤務

時間帯はもちろん、食事時間も就寝時間も各々まちまちであり、朝の出勤前「私物を持って衛門に集合しなさい」と言われ、集まれば、それは他の者と同じく貨車に乗せられて、着いた所は奥地の収容所であり、又別の開発作業に就かざるを得なかったのだ。

この翌年自分もそうであり、福島さん等仲間が前触れもなく居なくなったのもそれであったと思うが、必ずや先輩諸兄も俳句の心は持って行かれたのであろう。

そして僕自身、シベリアでの俳句集を「思い出」として一冊に纏めんと誓ったのである。

指物職場 星さん・八木さん

伐採作業から指物職場へと回された（幕舎生活から抜け新寮に入る）。

班長は郡山工場出身の星さんであり、ソ連当局のボスは退役とも現役とも分からぬ露軍中尉であったが、腕に入れ墨のある人だった。

この中尉が仕事の種類・内容と略図を星さんに

与える。

星さんは我々二十数人に作業区分を与えて作業を進めるのだから大変だったろう。大工経験のある者、僕のように全く素人の者等、皆ノルマのこなれば難儀されたと思う。

ソ連当局とも通訳なしの片言交じりの応答であって、我々の代わりに怒られておったこともあったようだ。

寒くてストーブを背に尻ばかり暖めていると「ヤポンスキー（日本兵）ネエハラショー（駄目だ）」の罵声が飛ぶのであった。

いつかの日、この将校が樋専門の兵に手伝わせ自分自ら樋の底板を作ったことがあった。数枚合わせた幅板に直径七十センチぐらいの円を描き、丸鋸盤で粗挽きした後、斧一丁で見事に円形に仕上げた腕前は、鉋で仕上げた以上のものであり、びっくりしたが、以後、敬愛の気持と変わったのであった。

そして、これが日本に勝った実力第一主義のソ

連人かと改めて見直したのであった。

窓の製作も大きき別に何種類かあったようだが、日本の家屋のように丸窓・欄間・雪見障子等の、いわゆる美的贅沢品がなく、ソ連の国らしく明かり採りを主体とした実質的なものばかりの生産であった。

我々捕虜はシベリア開発のための奴隷であったろう。入ソ間もなく三交替勤務が強いられ、生産に拍車がかかった。

毎日毎日窓と窓枠の製作であるが、ノルマの国らしく生産はさらに厳しかった。それでも技術のあったいわゆる大工経験職の一、二人の者は、昼休みもせず気も軽々とノルマ以外に内職の仕事をし、木のトランク等を作り、その報酬として何がしかのパンか煙草をもらっておった時もあったようだ。

我々は仕事の経験も希望も無く、監視の目を盗んでは休息を貪るばかりであった。しかしノルマと機械の合体した流れ作業方式には、付いて行か

ざるを得ないのだ。

次々と新しい材料が運ばれ、加工し組立てられた製品はどんどん出てゆくのである。機械加工の専門は八木上等兵である、その助手は大貫一等兵であった。

その組み合わせのコンビも宜しく、大貫君がケガキの済んだ材料を床から取って八木さんに手渡しするとジュージューと機械加工の音が唸る。その一本が終らない内に次の材料を大貫君が持って渡す。八木さんがこれを機械に当てる。ジュージューンと機械を休ませないのだ。

機械と真面目な捕虜人間によって仕事が進むから、他のケガキも穴あけも組み立ての者も皆、サボっておられないのだ。

否、機械作業とその仕事の流れに我々は追われなかも知れない。またそれを細かく監督し指図するのがソ連ボスの中尉だったのである。

窓も扉も大きさによって種類はあれど、同じような専門的な作業ばかりであり、捕虜としては仕

事として熱意を持てるもので無いのは当然である。

否、否、繰り返し返しの作業なればこそ幾らか身体に余裕を持ちたいばかりに勢い付く時もあったが、しよせんはソ連のためであり、早く日本に帰って自分の仕事をしたいのだ。

内地帰還後の昭和二十五年夏に、シベリア大工の経験を生かし、一・五坪の台所を増築したが、材料は角材でなく三寸丸太を安価に購入し、斧で四角にハツリ、柱と桁を作った。

引き戸は指物工場で覚えたように、ガラス六枚は矢羽根重ねの棧を作って押さえたガラス戸である。売り物にするほど立派ではないが、褒める人もおった。

こうして仕事にも慣れ順調に進んだが、幸いにしてこの指物の同じ仕事に二年以上も続かせてもらったことは、他の伐採・積載と異なり屋内作業であって、朝夕二キロメートルずつの通勤を含め在ソ四年を通しソ連の気候に順応、体力の保全に繋がり非常に幸運だったと思う。

でも我々には強く当たらず、温和で芯の強い人であったから班長としては最適であり、皆から良く慕われておった。

後年、星さんはシベリア奥地で橋の建設を命ぜられた折り、その仕事の意見具申で当局と合わず、営倉の処罰を受けたとか、橋の建設まで見込まれるほど優秀な人だった。

三号券と一号券

入ソ二年目に入り、一号券・二号券・三号券の食券制度が施行された。

二号券は営内作業を含め従来通りの普通、三号券をもらう者は優秀作業者であって、一号券とされた者は普通より作業が悪かった者だと言う。

食事はすべて個人受領であり、朝に朝昼二食分の食券を寮の日直（寮内人事係）からもらうが、その時は既にソ連当局から誰々は三号券、誰々は一号券と指示されておるらしく、一号券の食事はハッキリ食事が少なかつたのだ。夕食時となればこれは又深刻大である。

また、八木さんにはこんなことでお世話になった。

当時收容所には民主新聞ばかりでなく、アクテイブと称する民主主義を唱える専門の者が居って、彼等の主宰するインテリゲンチヤ大会があり、幸か不幸か僕が選抜された。

さらに地区大会がありそれに出席との、それは僕の勤務明けの睡眠時間に当たる出張だったが、彼は続けて二勤務し穴埋めしてくれた友思いの良き戦友だった。

結果は入賞せず並の成績だったが、温和ながらも仕事が正確で芯のある人だった。

シベリアでその後別れ別れとなり、出身の国など聞かず挨拶もせず申し訳ない次第である。

星さんは郡山工場出身であり、兵隊以前は分からないが僕の郡山工場の同期生を知っており、その話も進み、以来昵懇とさせて頂いた。彼は召集兵で僕等現役より年上の先輩であったが、性格は豪放磊落的であり、露軍中尉に代表として怒られ

しかしこれがソ連式「働かざる者は食うべからず」と言うから大騒ぎとなる。

反発と反対が功を奏したのであるう、間もなく一号券・三号券制度は廃止され、皆安心した。

だが当時、炊事では一五〇グラムのパンを秤に載せたであろう、小さいパンの小片が楊枝で何個もプラスされて渡されるようになったが、正確さを喜ぶと共に、パンの端の固い二号券は営内作業を含め従来通りの普通、三号券を貰う者は優秀作業者であって、一号券とされた者は普通より作業が悪かった者だと言う。

私もシベリア四年目の数カ月、ある作業班長となり、月ごとにソ連ボスより作業成果を聞き班員のノルマ計算をしたことがあった。班全体が一〇〇パーセントならずとも平均八五パーセントであれば、班員二十人中の五人を一五パーセントに申告し、残りの者を七五パーセントに報告して、一一五パーセントの者の褒賞金を班全体で分配することを非公認として任せられたのである。

シベリア四年目の八月、日本への帰還が決まり奥の収容所からシベリア本線タイシエツトに集結した折り、図らずも同県北上の鈴木君と原隊以来の秋田の某君と会ったので、シベリア四年間を無事生き抜いた喜びを祝い合い、僕の持つておったルーブル紙幣三分の一ずつを記念に分け与え、共にタバコを吸って生存を喜び合った記憶がある。

鈴木君とは帰還後、北上展勝地で花見会をしたが彼も早死にし、秋田の某君も一度会ったのみで、残念極まりない後日物語の結末となったのである。

四、健康診断と肉体の危機

帰還（ダモイ）

年一回の健康診断はソ連軍医と通訳、そして日本軍医と衛生兵の立ち会いで行われる。診断結果として第一グループと第二グループは屋外作業、第三グループは営内作業の区分であって、希望の内地帰還者は第三・第四グループから選ばれたようである。

我が寮、四国のK君は粥食が大の愛好家である。

どうなったのであろう。

シベリアに来て以来、白米の飯は一度も食べさせられなかった。

戦友達も、今日は一月一日の元日だ、今日は二月十一日だ、やれ三月三日だ、今日こそは何かうまいものをと期待しながらの抑留生活だったのである。

しかるに、毎日毎日が高粱か燕麦の粥のような軟らかい飯に、少しの塩魚と黒パンの食事を与えられるだけである。悲しいかな、あてがわれただけしか食えない抑留の食事なのだ。

四国のKならずとも誰でも早く帰りたいのだ。

ああ：早く帰って白飯を腹いっぱい食べたい。

抑留 第一回目の危機

その第一回目は、シベリアへの移動直後の昭和二十年十一月か十二月頃だったと思う。

シベリアという急激な環境の変化ではなかったろうか、図らずも「黄疸」になったのだ。

全く食欲がなく、ただらたとして力が出ず、顔

「今の飯の量ではどうしても腹いっぱいにはなれない：だから粥にするんですよ：」と言って、炊事からもらう粥のような柔らかい飯に、さらに水を足し飯盒一杯にしストープで温め、粥をさらに水粥のようにしてから、これをすすって食べておった。

「それでなくとも栄養が少ないのに薄めたんじやどうかなあ：」と言う人もおったが、二年目の夏、彼は第三グループとなり、いち早く内地帰還となったのである。

「Kの奴、早く帰れてよかったなあ：」「うまくやったぜ：」「しかし随分辛い時もあったようだが：」と噂する人もおった。

早く日本に帰りたい、帰るためにはどんなことでもしたいのは誰しもの本音なのだ。

伐採の斧で指を切っても帰らなかった奴がおったとの注意があったが、それまでもはしたくないのだ。だが敗戦になり満州から持って来、黒龍江の土手から船に運んだあの米は、一体どこに

から目の玉まで黄色くなったそうである。

「何か食べなければ：こんなシベリアなんかで死んでたまるもんか：」と思ったところで、食べたいものを売るところもなければ、買うことも出来ない抑留生活である。

日直は（寮内の世話人兼人事係）一目見て分かってくれ翌日の作業から外し、ドクター診察の手続きをしてくれたが、ソ連軍医は「ラポータ ダワイ（仕事に就け）」と言って薬も休養も与えず、その日も営内作業をするよう言われたのであった。夕刻、仕事から帰った戦友達も心配してくれたが、どうにもならない捕虜収容所である。毛布の中で思うことはただただ故郷のこと、母のことであつた。

そうだ、母はよく風邪等で休んだ時、片栗湯を飲ましてくれたことを思い出したのである。

「何か欲しいものは：」と言われて、戦友仲間同士の気安さに、その片栗湯のことを話したのである。不思議や：思いがけなくその片栗湯が出て

きて飲ませてもらえたのである。有り難かった、本当に有り難かった。小隊の者も分隊の者も注目の中だったろう。自分一人だけが珍しいものを食うのであったが、恥ずかしさも何もなかった。

戦友達が助けてくれたのだ。

聞けば、ジャガイモ二個が釘穴のオロシ金によつてすられ、水筒の熱湯が注がれてシベリア式片栗湯が出来たそうである。

欲張りではない、砂糖つけのない片栗湯であったことは記憶しているが、ジャガイモをどのようにして探し求めたのか全く知る由もなかった。

食券で炊事からもう食事以外の闇の物と分かれば厳しく問いただされ、問題になる抑留生活の中で好意であった。

とにかく食欲の全く無かった身体に片栗湯が入り、次第に良くなったのである。

母が夢枕に立ってくれたのだ。そしてもちろん、戦友達が助けてくれたのであった。

思えば数日前、工場の引き込み線のわずかなレ

ールの高さにも躓いて倒れたことや、收容所の丘の急斜面を登って寮に入る時、戦友達に手を添えられたこと等が思い出されるのであった。

抑留第二回目の危機

それは前項で述べたシベリア式健康診断である。そしてその健康診断が面白いのである。ラツパ型の小さな聴診器を持ったシベリア軍医が我々の胸に顔をくつつけんばかりにし、それを耳に当てながら診察するのである。

こんなオモチャのようなもので：笑いたくなるのであるが相手はソ連軍医である。

さらに我々を裸にして立たせ、尻の肉をツネルのであるが、その肉付きが良く弾力のある者が第一グループなそうである：という診療方法である。僕の番になったが一回で終わらず「ダワイダワイ」と言つて二・三回身体を回しましたツネルのである。ソ連軍医は通訳に何か言つて衛生兵が何かを書いた記憶があつたが、残念ながらロシア語が分からないので別に気にも止めなかつた。

三年経ち奥の七十五キロメートル收容所に移動し最初の山作業に行く途中、見知らぬ戦友が寄つて来て「吉田さん：貴方はあの時、あの四十一キロメートルの時帰れたんですよ。あの時ある衛生兵が貴方の名前を別の者にスリ変えて、そいつが、そいつの親しい同県人を帰したのですよ：」と話しかけられたのであった。：と言われても既に三年も前のことであり、僕もシベリア四年目に入り、ある仕事の班長と寮長をしておつた時のことだった。

「畜生、同じ日本人の中で：、よくもそんなことをしたもんだ：」と思つたところで、その者を殴る事も怒鳴る事も出来なかつた。

その当時立ち会ひの軍医もどこに転出したのやら、今この收容所には一人の将校も居らないのだ。どこに届け出てどのようにしても覆水盆にとはならんだらう、虚偽の帰還をどうすることも出来ず、己の憤懣を自らの思いで吞まざるを得なかつたのである。

思い出せば、あの黄痘前から、少しの段差でも躓き倒れる等、ようようの生活の中を、シベリアの労働に耐えて来た自分であり、善悪共に異郷の涯の事柄？問題でありならんと心を静め、自分自身の解決以外にないであろうと心に涙を呑んだのであった。それにしてもその衛生兵、北陸の奴と聞いたが、真実だったらとの思いは残る。

抑留第四回目の危機

第三の危機は、建設作業中の事故で失神したことである。

思えば色々の職種があり、色々の仕事に就き、させられたのも捕虜の天命であらう。

この地タイシエツト四十一キロメートル地区の開発と生産のメドが立つたのであるう、奥の七十五キロメートルの收容所に転出させられた時も、指物時代の星班長と同行し得た。

奥に移動しても、経験豊かな星さんは寮の建設を命ぜられ、我々は伐採した松の木の皮を剥ぎ、太鼓型に両面を斧ではつりして、この丸太を土台

から順に積み重ねる丸太建築であったが、底面は斧で溝を掘り、付近の山から苔を採取して防寒の気密材として詰めた丸太を積み重ねたのである。

とにかく窓部分の切り欠きも終わり、窓際壁上部に長い丸太を載せ、窓の両壁部を固定する作業に入った。

長木を渡してその上に丸太を載せて、これに跨り斧で溝をハツっておった時、僕は不覚にも百八十度回転してそのまま落下し、地面に捨ててあった丸太の切り欠きに背中を打って気絶したのである。

「オーイ 吉田……」「吉田しつかりしろ……」と、揺り起こされた……。

だんだん顔の上にいる周りの人達の頭を薄ボンヤリと……そして次第にハッキリと見る事が出来たのであった。

郡山の星さん（現性尾花さん）、本当に有り難うございました。皆さん、有り難う。

当時二十七歳の若さであり、この背中への打撲は

シベリアの仕事に追われて内地に帰るまで気にもしなかったが、結婚後子供達と回転宙返りの遊びの時、背中に息の詰まる痛みを感じ、病院のレントゲン撮影結果「背骨に傷があり、傷が傷を覆う軟骨が生まれて、二個の背骨が一個となって固まったために曲がらないですよ……」と言われ、以後無理な屈曲運動を慎むよう言われた。「後遺症」となったのである。

当時ソ連では物資が少なく、この寮建設の釘代用に針金を切って使用したが、屋根下の厚い天井板の上に、さらに厚く土を敷き、窓下の土囲いと共に防寒のためのシベリア式建築法を教わったことは別として、その当時は高粱米の食事だったので排便が苦しく、指でツマミ出さざるを得なかった当時の苦しみも又、思い出としてこの建築と共に思い重なるのである。

五、春夏秋冬 異国の丘

抑留中の仕事は、多種多様である。

伐採・搬出・積載・積み降ろしから製材工場の

製材・乾燥・倉庫・指物職場電気と鍛冶、旋盤にボイラー係、はたまた春と秋にはコルホーズの農作業。そして管内は、炊事、理髪、入浴場、洗濯場とあらゆる職種があったが、すべて自分からの選択は不可能であり、命ぜられるままの作業であった。先輩福島さんも当時井戸掘りの班長をしておった。

「今日の業 井戸より出でて 若葉風」ソ連人将校官舎等一般人の地形？によつて掘ったらしが、土まみれになって穴より顔を出した時の若葉風、何という清涼感であろう。ホツとした丸い顔が目には浮かぶようである。

先輩には未だ未だ良い句があったでしょう。囲碁も教えてもらい、俳句も先頭に立って仲間を集める等逆境のシベリアでは大変有り難うございました。

我々の住んでおった収容所は千人ぐらゐも居たろう。急斜面の丘に点在し、各戸外の通路は敷板で連絡されておった。

上に住む者は、寮に帰る際には勾配の強い坂を登らねばならず、毎日の通勤には大変だった記憶があるが反面、遠くまで眺望ができたのである。

夏は夜十一時過ぎまで明るく、夕食後一眠りしてトイレに起きた時等、未だ日中かと思うほど明るかった、これが白夜である、我々は三々五々寄り合つて雑談に時を過ごしたが、それは皆望郷、故郷のことばかりであった。

一望はるかなる森林は数十キロならん遠くまでも続き、その果ては河口のようでもあり、入り江のようでもあつて、月明かりのため定かではないが松の木も点在し、それはどこまで続くであろう。北の果ての（地球儀？の）北極圏まで続くならんと思えばそれは正しく神秘的であり、また寂しくもあつて、家族と離れ、抑留となつて今この地の我が身に想いを連ねるのである。

やがては夜空に一際光る北極星は真上にあり、首の痛くなるほど見上げなければならなかった。そして本当に遠い北の緯度に立っていることを実

感したのであった。

こんな時である、自分の俳号を「極星下」にせんと思い巡らしたのであった。

日本への帰還後、図書館の世界地図によってタシエットの位置を確認したが、北緯五六度線上にあり、樺太の北端よりさらに北の緯度に住んで居ったことを知った。

一次夜勤を終えて帰るのが朝の三時である、夏ならいざ知らず冬であつて、身も心も縮む冬である。「集合：」夜は更けわたり冷気は深々として沁みてくる。作業班ごとには帰れないのだ。昨夜営門を出た人数が揃わなければ、警備のソ連兵はもちろん、我々としてもここを出発できないのである。また「集合：」、寒くて集まらないのか、ノルマが遅れて集まらないのか。

集まって居った者二十〜三十人、声を揃えてまでも「集合」、叫べど答えず。吐く息が凍つて防寒帽の口元に回りつく。それでも「集合」。足が凍り身体が震えるから、我々はただただ足踏みして

あの山の上に、上まで引つ張り上げてから捨てるにしても、外套を着、大手套をしての作業なれば、滑ることもあろう。足を踏み外し転ぶこともあろう。一人では出来ない力仕事であつて、納得せずともお互い抑留の身の上のことなれば気持ちの上で了解し、無言のまま自分の職場に向かつてのである。

こうして自分自身のことならずとも、震えかじかみ足踏みしたあの辛い思いは、永久に忘れることができないのである。

今夜もそうであつたが、帰りはもうお互い無言であつた。

雪明かりにうごめく無言の隊列、それは疲れとままならぬ人生、引かれるごとく歩く我々であつたが、誰にも言うことの出来ない抑留の身なのである。

段々、収容所の灯が小さく見えて来る。もう少しで帰れる、眠れるのである。

次第にハッキリ見えてくる。そして近づく収容

待つより外はなかつたのである。

もう二次夜勤の働く機械の音が聞こえて来る。それでも次の者達に引き渡し出来なかつたのか深夜である。早く帰りたい、早く帰つて寝床に入りたい、：寒い：。

吐く息が凍つてまつわり付き身体の芯から寒く、もう叫べないのだ。

こうして連夜、製材の班だけが遅れるのであつた。なればノルマだと言う。

「俺達だつて仕事をし、お前達のために待つておつたんだぞ」の文句も、寒さで言う力も出ないのである。とにかく帰ろう。寒い。

翌日、作業の始まる未だ明るい時分、皆で製材職場に行つて見た。

製材の撒播さばは板にして板に非ず。シベリアの撒播は直径一メートルの大木より出る撒播なれば、厚くて重く長いのだ。その撒播が山となつて積まれており、夜勤の稼動する薄暗い野外の捨て場は大変だつたらう。

所と人家の灯。だが不思議にもその辺り、部落の上の空だけがなぜか雲のごとく白く固まつておつたのである。なんだろう？どうしてなんだろう、誰も分からない。誰もがハッキリ言わなかつた。

だが毎夜のことなれば、我々は次第に「空気が凍つたのだ、そうなんだ：」と言うようになった。

それは部落の生活上、諸々の水蒸気が空に上つて凍り雲状となつたもので、仲間千人の呼吸の吐く息もあろう。夜を通して炊くペーチカの薪の水蒸気もあろう。早起きする我々炊事が作る炊飯の水蒸気もあろう。それらすべてのものが部落の上空にあつて、白いガス状固まりとなつたものならん、吐く息の白さと同じ現象ならんと頷いたのである。

内地では聞いたことが無い。しかしここはシベリアなんだぞ、生きているぞ。

俺は生きているんだ。兄よ：父 母よ：明けなんとす凍る異郷の四時であり、静寂そのものの夜である。

シベリアは寒い。当然ながら北極圏の国なのだ。小学校で習ったツンドラ地帯も見た。軽便鉄道敷設のツンドラ地帯で氷の沼に枕木とレールを敷き、小さい機関車で原木の搬出を台車状貨車で行ったのである。

入ソ当時の宿舎は天幕であり、一晚中靴も脱がずに寝たこともあった。

震える身体はいかんともし難く、ただただ凍傷にならぬよう注意し、用便以外寒さに触れる寮外に出る等の要らざる体力の消耗を避けてジツとしていることだけだった。

こうしたシベリアでは外気が零下二五度以下になれば屋外作業は休みであると言う。朝食後腹も満ちて喜んで寝ておいたら、「気温が上がったそうだ、作業集合と！」起こされることもあった。

このようになった冬は、朝九時頃からようやく明るくなり始め、夕方は三時頃から暗くなり始めるのは、白夜とは反対であり、地球の緯度による

ものだ。

防寒帽に大手套、飯盒を凍らせぬよう抱くようにしての通勤なれど四列縦隊、隣の者にも話しかけたくない、できないのである。

うっかり素手を晒すものならば、たちまち凍傷となる寒さなのである。

こうした寒さもやがては春となり、雪も川となって流れ花も咲く。

我々の口元もほころび、会話も弾むようになってのである。

「皆忙しくなるんだなあ…」

「そうか、帰ったら必ずどこかで会おう…」

そして可憐なる小さき野の花、何と言う名の花であろう。

六、祈り

入ソ初の収容所で迎えたシベリア一年目の冬、栄養失調で死んだ戦友がおった。

夕食後、各分隊より何人かずつ出て墓を掘ったことがあった。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十年二月二十三日

出生地 盛岡市新田町

学歴 厨川尋常高等小学校高等科卒業

国鉄土崎工場見習教習所卒業

昭和十年、国鉄盛岡工場採用、

後、土崎見習教習所入所

昭和十二年、盛岡工場復帰、

空制作業

昭和十六年徴兵検査

昭和十七年 大阪集合、朝鮮平壤教

育隊二等兵

昭和十八年 満州榆樹屯第九野戦航

空修理廠八三四一部隊復帰

一等兵・上等兵・兵長・下士官勤務

兵長

昭和二十年三月、作戦命令により移

動修理班として南滿転出

昭和二十年八月、奉天第十一野戦航

九野航出身移動修理班の仲間は知っておったが、終戦以来十一野航・戦車隊はソ連が編成した寄せ集めの新部隊であったので、顔も名前も分からぬ戦友であったが、召集された初年兵であったと言う。寒い風土で苦勞したのであろう。「眠るがごとく」の知らぬ間の往生だったらしいが、我が身に引き換え感ずるところあり、引かれるままに自ら手伝ったのである。墓掘りの指揮は中隊長の准尉（人事係）であり、各分隊を集めて指導したが土が凍ってツルハシも跳ね返る凍土であり掘れずに、薪を焚き炭火の残る中掘ったが未だ土が固く、再度薪を焚いて掘ったのである。

炎々として燃え上がる夜空の中、その火の粉を見詰めながら思ったのである。

ここは日本を遠く離れた雪と氷のシベリアなんだぞ、お前だって父も母もおったろうに…

死んではならないのだ、死んでなるものか、還るまでは…と言って合掌したのである。

抑留入ソ
空修理廠にて終戦
昭和二十年十月 タイシエツト収容
所

内地帰還
昭和二十四年九月、盛岡市に帰還

国鉄盛岡工場復職

昭和五十一年三月退職

昭和五十一年四月、有限会社小笠原
商店入社

昭和六十年十月退職

(岩手県 田辺 壮久)

シベリア抑留記

静岡県 小川 賢 介

一、生い立ち

大正十年(一九二二)三月二十八日 千葉県銚子
市下穀町に生まれる。銚子中央小学校、県立旭農
学校を経て、

昭和十六年(一九四一)三月 盛岡高等農林学校
農産加工学科を卒業。

四月 日東製飴株式会社(東京都荒川区尾久六
丁目)入社。

十二月八日、大東亜戦争勃発。

世は正に風雲急となる。銃後の国民は食糧難に
苦しむも、職業柄、甘味品等に不自由することな
く生活することができた。

昭和十七年三月二十日 応召のため退社。

四月 三島市中部第九部隊へ現役兵として入隊。
家族構成 父小川信一は地元のヤマサ醤油株